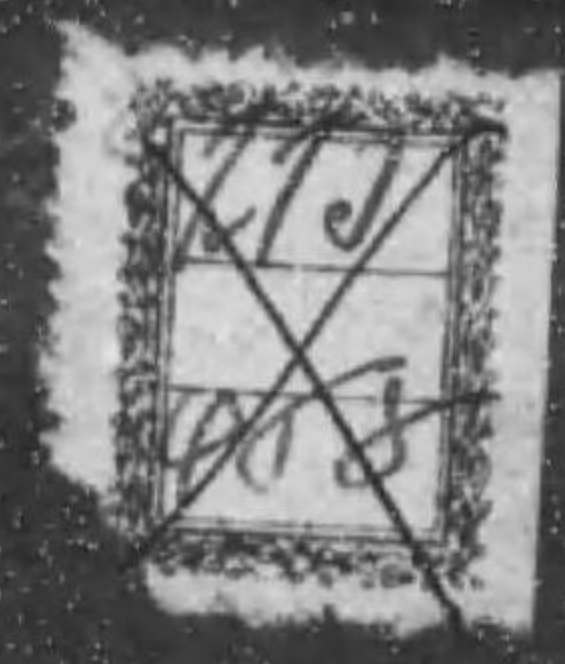


特116
701

志賀
齋
友有齋
梅枝
整影古



始



47 116
701



志 賀 概 説

内七卷ノ一

一臣下、霞立つ春の頃、近江國志賀の山に到りて花をながめぬる處に、老若二人の山賤、薪に花の枝を折り添へたるを負ひて來り、花の蔭に憩へるに、不審に思ひ尋ねれば、道のべのたよりの櫻折り添へて薪や重き春の山人といへる大伴黒主の歌を引き、花の蔭に憩へるは賤しき身におほけなけれど、彼の歌人を思ひ出でてのことなれば許したまへとて、延喜の聖代に歌道の興れるを説き、遂に其身の大伴黒主の化現なることをほのかしと立去りしが、程も無く黒主の靈山神となりて現れ、舞ひ奏でて興じけり。

色。榎引く。雲の朝ほらけ。榎引く。
 雲の朝ほらけ。のどけき。風の音羽。
 山けさ。新え。来れ。べ。れ。そ。の。み。み。
 負ふ。志賀の山。新え。や。湖遠き。眺め。か。あ。
 湖遠き。眺め。か。あ。急ぎ。の。程。子。江。州。
 志賀の山。よ。き。ま。て。の。誓。く。此。の。
 家。に。ひ。ひ。て。花。と。眺。め。う。ず。る。み。て。の。

シテ射二人 柳ヘテ用カニ
 真調上 拍子合ハズ

波。や。志賀の都。の。名。を。留。め。て。
 昔。あ。が。ら。の。山。櫻。雲。よ。別。れ。て。や。
 心。な。ま。き。の。も。情。の。跡。を。ら。ん。
 山路。よ。目。ま。が。れ。ぬ。撫。致。牧。笛。の。聲。
 人間。萬。事。様。々。の。世。と。渡。り。行。く。
 牙。の。有。様。お。ご。と。に。遮。る。眼。の。前。
 老。の。歌。と。や。送。ら。る。ら。ん。餘。り。よ。

シテ二人 柳ヘテ用カニ

人間萬事様々の世と渡り行く

餘りよ

ありしうへに今更行と^{ナニ}か答へ中さん
ツレカ^ル上^ニサラリ
又奥^{ツヨク}深^{ナカ}き山^ノ路^ノあれば松も松原も
多^クけれども^モかりあき花^ノの陰^ニ
休むと^{シテ}シテ^ハ用^{カニ}カ
の作^ハ面^ニ自^ラあきよあ^リさ^リな^らながら
彼^ノの黒^ク主^ノが教^ノの如^ク。其^ノの横^ニ賤^シま
山^ノ賤^ノの^ノ新^ニと負^ヒひて^テ花^ノの陰^ニ
ツレカ^ル上^ニサラリ

休む姿^ニの^ノげにもまた其^ノの身^ニ元^一
意^ヲせぬ振^ニ舞^ハあり^ラ許^スし^テ移^ルへや上^ニ腐^ラ
達^ヲ ^{ツレカ} ^ル上^ニサラリ ^マ ^カ ^ル上^ニサラリ ^シ ^テ ^ハ ^用 ^{カニ} ^カ
これ^ハ劣^クる^トも賤^シむ^ルあ^ノの^ノ故^ノ人の
扱^ハは真^ニなる^リけりや^コくも古^ク款^カ
の^ノ喻^ハの^ノ心^ニともつて^テ今^ノの^ノ返^ル答^ハ中^ニ
一^ニたり^シ ^シ ^テ ^ハ ^用 ^{カニ} ^カ
一^ニたり^シ ^シ ^テ ^ハ ^用 ^{カニ} ^カ

やらんも。更々知らぬ身あれども。

賤しき身も思ひよりて 紙の

大伴の黒主が心とよする老の彼

私教の浦回の藤の葉 かくたえ

おく世傳りの くれの黒主 くれの真よ

シテ しまも賤しき 山賤の 上り

應せぬ事あれど 許させ給へ故人

○小菰

○か番獨吟

多きもの思ひ出又 花の陰は休まん

げにや今も昔も 筆と遠くて貫之カ

詞の玉のおのづから 古今の道と

かや古今の道とかや くれの

かや時代を尋ねるよ 延喜の聖代

の古。國を惠み民を撫で 萬機の

改を治め 怨れば其の御時に

ASB Book

五

至つて和教の道盛んありて古今
の教と撰ひ二聖六教仙と初めと
してそのおの人は。世への善の
はひ廣ぶあり。杖は繁き木の葉の
露の色は深み行く教人の心は花は
あるとかや。げに埋れ木の人の知れぬ。
そわがまでの情とかや。切もそも。

難波津侍香山の影ええ山の井
の清くは浪か思ひ草の露住まおれ。
来り色あれや。演の志砂より。教多き
その葉の心の花の色香までも。
妙ありや。敷鳩の道ある。所代の歌ひ。
知れば三十一文字の律も守護し
給ひて。無見頂相の如来も感應。

志賀

六

空れ給へば君も安全よ萬民時を
 樂みて都鄙圓滿の雲の下四海
 八洲の邦までも浪の聲萬歳の
 響音の長閑けかりけり
 ぎの唐代久し萬の政の道直り渡る
 日の東南よ雲収まり西北よ風静か
 にて詞の林榮ゆくや花も常寂名の

山松の巻よ謡み聲までもこれ
 和歌の依り漏るべしや天地を動し
 鬼神も感とあすさかや切げにや
 異ある山賅のげにや異ある山賅の
 家路いつくの末あらん床しき心
 あえべし今は何行をか色むべき
 其の古は大伴の思ふまじをれし

時代こそ此の山の神も人や見る
らん 上地 此の山の神こそ不忠儀
やこその大伴の シテカウシテ 此の黒主が家の
名の 地 大伴が シテ われんた
友もあくて獨り 山 山路の宿の陰
よ長休みしつる 船 船か や 上ゆふべの
雲よ立ちかかれて 志 賀の 宮 宮路よ

海のけり 中 志賀の 宮 宮路よ 海 海のけり 中 入語向
口 上 待 待 切 切 今 今 白 白 春 春 の の 山 山 さ さ は は 交 交 り り あ あ ん ん
春の山ささは交りあんな言れあは
げの 花 花の 陰 陰月よ 依 依りて 天 天の 原 原 時 時の
調子よ う う つ つ り り く くる 舞 舞 歌 歌の 聲 聲 て て そ そ
あらた あ あ れ れ 舞 舞 歌 歌の 聲 聲 て て あ あ ら ら た た あ あ れ れ
雪 あ あ ら ら た た 幾 幾 た た び び 神 神 と と 拂 拂 ひ ひ ま ま り り 花 花

後シテ黒主上 大 大 キ キ ク ク 明 明 カ カ ニ ニ
拍子三合六 出 出 場 場

七五八

て 地冠の 指の 白和幣 松の 立ち 枝の
青和幣 かく る や か る や 梓 う 春の
山 邊 を 翻 え ま れ ば 道 も き り あ へ す 教
る 花 の 雲 の 羽 袖 を 返 し つ 紅 の 清
袴 の ぞ ば と 取 り 拍 子 と 揃 へ て 袂 か
く ら げ よ 面 白 き 奏 で か あ げ よ 面 白
き 奏 で か あ 。

鶴

概説

内七卷ノ二

諸國一見の僧、攝津の國蘆屋の里に一夜を明しけるに、更け行く沖の波間より異
 體のものゝ寄り來れるを見れば、丸木船の如くにて乗りたる人も見えず、何物な
 るかと尋ねれば、昔近衛院の御宇に頼政の箭先にかかりて命を失ひし鶴の亡
 靈なりと答へて其時の有様を語り、浮み難き身を弔ひ給へとて見えすなりし
 かは、僧は夜もすがら讀經しむる處に、面は猿、手足は虎なる恐ろしげなる鶴
 の本體現れ、往時を懺悔し、尚頼政は御劍を恩賞に賜り、我は空穗舟に入
 られて淀川に流され、斯くも此浦に漂ひ來れる由を語りて、暗の中に姿を失
 ひけり。

此曲多少緩急アレド總シテ流ニナクサリト強ク詠フベシ

役別	装束	附	季
ワキ旅僧	角帽子 着附無地熨斗目 水衣 腰帶 珠数 扇		四
前シテ舟人	面三日月 黒地金段鉢巻 黒頭 着附無地熨斗目 水衣 腰帶 扇指 棹持		月
後シテ駕	面猿飛出又小飛虫 赤地金段鉢巻 赤頭 着附紋厚板 半切 法被 縫紋腰帶 修羅扇指 打杖持		曲柄 督古順
			目番二畧 目番五四
			級 二
			里ノ屋簷即律武團津編
			所

鵝

觀阿彌清次作

次舟僧サリ
 拍子三合
 世を捨て人の旅の空。世を捨て
 人の旅の空。来し方いつくあるらん
 此の種は三態野より来りて作。又
 此れより都より上らぐやと思ひ給
 種もあく。歸り紀の路の開新えて。

通行上

早舟

歸り紀の路の閑静えておぼろしく
末の和泉ある。信太の森をとうち
過ぎて。松原見え。を里の。こ
信の江や難波信。蘆屋の里よ
多きよけり。蘆屋の里よ多き
よけり。 甲 元 元 元 元
律の圓蘆屋の里よ多きよ

日の暮れての移よ。宿を借らばし

やと思ひぬ

三舟人サシ上
一 声
抽子各六

悲しきかあや身は龍鳥。心を知
れむ。盲者の浮城だ。園中よ埋
れ來の。さらば埋れも果てず
て。七心仔よ。踊ららん。 一 七 上 元 元 元 元
む。後の波のうら。後舟。 地 元 元 元 元
か。 一 七 上 元 元 元 元

堪へぬらよし入を シテ中 悲びをうへま
際 早カレ上ニサアリ なき不思議やあ夜も更
け方の浦波よ幾かよ深ひさのる
物を見れば聞きしよ交らすして
舟の形ありあがらたぐ埋れ来
の如くあるよ交る人歎もさだか
あらずあらず不思議の者やあ

シテ内
ウケテ

不思議の者よ美あるそあたの妙
ある人やらん カレ上 固より憂き言の埋れ
木の根知れぬ牙と朽腐しめさる
不審のあさを終ひる ヤト いか
それいた此の里人のさも不思議
ある舟人の夜を来るといひつる
よ。見ればさしも違はぬわれも

三

三

周と弔ひ給へ有難や後人の世を
透れたる御事あり。われのみ
ぞ捨てお毎法のかを頼むあり
法のかを頼むあり。何とんかせ
ども更よ人間とんえすいがある
者ぞ名とんあ告りゆへ
衛の院の法守り。頼政が先よ

かり。命と失ひし時の中
もの。七ひよてい。その時の有様
妻しく語つて。聞かせしゆべし。
法を弔りて。給はりゆへ。引ての鶴
の。七ひよてい。其の時の有様妻しく
語りゆへ。跡とん懇よ弔ひゆべし
クリ上地。ツヨク。拍子三合ハズ
引ても。近法。の院。の法。在位。の時。

仁平のころほひ主上よりあふあ
仲愷あり有強の高僧貴僧も
作せて大法と修せられけども
其の志より更よあかりけり
の丑の刻ばかりありけり
東三條の本林の方より雲一むら
立ち来つては殿の上よ敵へば

必ず怯え給ひけり
公卿詮議あつて定めて爰化の
者あるべし武士も作せて
あるべし源平あ家の兵と
選せられける頼政と選み出
だされたり頼政の時の兵庫
の頭とぞやける頼みたる郎等

よの猪の早を唯一人より具たり。
我が才の二重の狩衣よ山鳥の尾
よてをいなりける。夫々二筋重藤
の弓よ雨り添へては殿の大床よ
伺候して清徳の刻限を今や
今やと侍ち居たり。さる程よ案
の如く。黒雲一むら立ち来り。侍

殿の上よ敵ひたり。頼政きつと
えよぐれハ雲中よ怪しきもの
海あり。矢取つておちつかひ。南無
の幡大雲降し。心中よ祈念して
よつひきひやうと救つ。夫よ手應
してをたと當る。得たりや。おうと
矢叫びして落つる所を猪の早を

つとまりて續けさまよ九刀ろ
刺いたりけるさそ火と燈もしよく
見れば頭ハ猿尾ハ蛇足手ハ虎の
如くまで鳴聲鶴又似たりけり
恐ろしなんども畏ある形あり
けり。げに隠れあま世語りのぞの
一念を翻し浮む力とあり給へ

浮むべきたより諸の清縁三角
柏又あらばこそ沈むは浮む縁あ
らめげにや他生の縁ぞとて
時もこそあれ今宵もあま
の人はあひ竹の掉取り速しう
ほ毎葉あると見えが夜の彼よ
厚きぬ沈みぬええつ隠れ絶え絶え

厚

〇獨吟は舞^{切進}。上^上。東云條の林頭は暫く飛けし且三つ
 ばかりの夜お夜おに敵の上には飛び
 下れば即ち流恨頻りよて玉體を
 おやましておびえ魂消らせ終め事

も神が爲す業よと怒りをおとす
 思ひもよらざりし頼政が矢先に當れ
 言葉も失せて落々石々と地は倒
 れて忽ち又倭せし事思へば頼政
 が矢先よりは君の天討と當り
 けるよと今こそ思ひ知られ左れ
 其の時獅子王と

云々法ゴ鈕ニと。輕ニ改ニよ下ニされけニるニと
字オク治リのヲ大ニ臣ニ賜ワりてテ階ニと下ニりテ終ニみ
よ折ハ節ハ鄭ク公ク音トつれレけレばテ大ニ臣ニ取
りあハへズ シテ上伸ヒリほニぎス スル名ニもモ雲ニ居
よ。あニぐるニカニあニと。信ニせレられレけレばテ賴ニ政ニ。
右ニのニ膝ニとニつニいてテ左ニのニ袖ニとニ廣ニげ
月ニとニサニーニ目ニよニ懸ニけてテ 上スル張ニ月ニのニ。

えニるニよニまニかニせニてニと。仕ニりテ清ニ鈕ニと
賜ニ厚ニのニ法ニ前ニとニ罷ニりテ海ニれニどニ賴ニ政ニハ
名ニとニあニげニてニ。わニれニのニあニとニ流ニすニうニつ
ほニ毎ニよニ押ニしニ入ニれニられニてニ流ニ行ニのニ。
よニどニみニつニ流ニれニつニ行ニくニ末ニのニ鶉ニ殿ニも
同ニトニきニのニ屋ニのニきニうニらニわニのニ浮ニ洲ニよ
流ニれニとニまニのニてニ。行ニちニあニがニらニうニつニほ

毎の月日もさるさるす。暗きより
 暗き道よぞ入りよける。遠よ
 照せ山の端の遠よ照せ山の端
 の月と共よ。海月も入りよけり
 海月とをよ入りよけり。

大原御幸 概説

内七卷之三

高倉天皇の中宮にして安徳天皇の御母なる建禮門院は、平家の一門長門の國早
 鞆の沖にて悉く没落せる時、御身を投げさせ給ひしが、源氏の兵に助けられ、再び都
 に上らせ給ひて御出家遊ばされ、山城國大原の寂光院におはして先帝并に御母二
 位殿の御跡を弔はせ給ひけるを、後白河法皇あはれに思召し、文治二年の初夏の頃
 萬里小路中納言以下を随へて御幸あらせられたり。法皇四邊の景色を眺め給ひて阿
 波内侍と御物語あるうち、女院は大納言局を伴ひ、上の山より花を摘みて御歸り
 あり、先づ庵室の内に請じ給ひて叡慮の程を拜謝し、やがて安徳天皇御最後の
 様を細かに語りて共に御涙に沈ませ給ひしが、時移り、早や還幸ともなりければ、女
 院は柴の戸に、暫し御輿を見送りて庵室に入らせ給ひけり。

此曲心得多キ曲ニ依リ篤ト心シテ謠フベシ
小書 庵室留 寂光院

役別	装束	附	季
ツレワキ大 臣	洞烏帽子 着附厚板 袷袴衣 白大口 紋付腰帶 扇		四
ツレニ人 内侍 大納言局	面連面 髪 花帽子 着附摺箔 無地耐斗目 珠敷持 扇ハ籠持 後向ハ妻木簾持		月
前シテ 建禮門院	面若女 髪 花帽子 着附摺箔 白綾 珠敷持		曲柄
後シテ 同	前ニ同シ但紫水衣ヲ着レ右ニ珠敷左ニ籠ハ木葉入レ持		三番目(葛物)
ツレ 後白河法皇	花帽子 着附白綾 水衣 白大口 浅黄指貫 紋付腰帶 掛絡 水晶珠敷 扇		高一等之部
ワキツレ 奥昇ニ人	着附厚板 白大口 腰帶 奥昇ヲ		部級
ワキ 萬里小路中納言	風折烏帽子 着附厚板 單狩衣(又ハ長綱ニ) 白大口 腰帶 扇		

大愿寺

世阿彌元清作

尾上大臣内 用カミ連シテ

これの後白河の院は侍人なるは下
ありござても此の度先帝二位殿
と初めなり。平家の二門長門の
國早鞠の仲よりして悉く果て
絵ひての女院も御牙を投げさせ
給ひゆをと取り上げなりがひあふ

御命助かりたつまゝ三河の
身範頼九郎大夫の判官義經
兄弟供をヤし三種の神寶
事故あく都ニ納まり給ひサる
程に女院の都ニ移らせ給ふべ
かりしと。先帝安徳天皇の御
誓ヒ托ト並ニ二位殿の御跡御弔の

ためよ。大原の宗光院ニ浮世と
厭ハひ出度ハいと。法皇御幸とあされ。
御訪ヒあるべきとの勅護マて候間。
御幸ノの山路ヲとも中シしつけカやと
存ト候カ。女ヲ又ニ相カある。大原へ
御幸アルべきあれば。行幸ノの道
をもつくり其の備メを仕リ入

山より摘み採りてし 局ウケテ用カニ

も御供 オントモ ずし ツマギ 凡木 ワラビ 蕨 ワラビ とおり供 グ 湯 グ

みろ シテサレ上 あ 拍子合ハス 人 ハ ち ハ し ハ の ハ べ ハ

事 シ なら シ ざる シ も シ 悉 シ 達 シ 太子 シ の シ 浄 シ 飯 シ 王 シ の シ

都 ミ と ミ お ミ 出 ミ て ミ 檀 ミ 捺 ミ 山 ミ の ミ 吟 ミ し ミ 道 ミ を ミ

凌 シ ぎ シ 菜 シ 摘 シ み シ 水 シ 汲 シ み シ 薪 シ

換 シ ぎ シ 難 シ 行 シ し シ 仙 シ 人 シ 小 シ 使 シ へ シ せ シ 給 シ ひ シ

半中納言上 用カニ 法皇 法皇 御 御 立 立 諫 諫 拍子 拍子 合 合 ハ ハ ス

て ト 終 ト り ト 成 ト 道 ト あ ト る ト と ト か ト や ト わ ト れ ト も ト

佛 ホトケ の ホトケ 為 ホトケ あ ホトケ れ ホトケ ば ホトケ 御 ホトケ 花 ホトケ 籠 ホトケ と ホトケ り ホトケ 高 ホトケ

山 ヤマ 深 ヤマ く ヤマ 入 ヤマ り ヤマ 吟 ヤマ み ヤマ 尚 ヤマ 山 ヤマ 深 ヤマ く ヤマ 入 ヤマ り ヤマ 吟 ヤマ み ヤマ

丸 マル 重 マル の マル 花 マル の マル な マル め マル 珠 マル と マル 素 マル ね マル て マル や マル

暮 アス 茶 アス と アス 慕 アス む アス 山 アス 路 アス り アス あ アス け アス け アス ゆ アス

露 ス も ス み ス か ス み ス 茶 ス お ス け ス ゆ ス く ス 露 ス も ス

み ミ か ミ み ミ 茶 ミ お ミ 大 ミ 原 ミ の ミ 序 ミ 幸 ミ 急 ミ 心 ミ

ワ半附

カル上

拍子合ハズ

行幸と早めやしし向大原入御ゆ
 かくて大原より幸あつて
 院の者候と見えわたせハ露結ぶ庭
 夏草繁りあひて青柳急と
 礼一つ油の厚孝波又揺られて
 錦とさらすと疑ちる号のふ吹
 咲き乱れ八重立つ雲の絶向より

○小詠

拍子合

上赤月

柳子重シモリシトリ

山郭公の一聲も君の馬幸と侍
 ち顔あり 法皇池の行と教候
 あつて池水にけの梅教り敷
 まて彼の花ころ盛りあひけれ
 むりよける岩の隙より落ちくる
 岩の隙より落ちくる氷の音え
 由ありて緑蘿の垣翠平黛の山

後一地サかくとも筆イも及びジがたナ。
一一字一の一所一堂一あり一。堂一尾一破一れて一は霧一。
不不断断の香と焼き。樞落落ちて。月
もまた常任任の燈火火とかくぐと反
かかるる所所が物とごやかるる所所が物とす
ごごや。引れあるこそ女院院の御庵庵室室
にてありげはゆ軒軒よの意意朝朝顔顔這這ひ

かかり。蒸菘菘佳佳深深く。団せせり。あらら物物
ままごごの氣色色やあめめり。はの庵室室
のうちへ案案内内申申しゆ。班班ままてわた
りゆぞ。引れの方方里里の小路路の中納納言言
にてゆ。引引れのささて人目目ままれある。山
中中への行行とて御御物物たたりゆぞ。引
引引れの女女院院の御任任居居御御務務ひのたため。大

大原御書

法皇これ迄は幸よめての 内侍ウケテ 女院の上の
 山へ花摘に御出でてはて入る御留守
 にての 早用カニ 御幸の由ヤしてのへは。
 女院の上の山へ花摘み御出でてはて。
 今の御留守の由は暫く此の處に
 出度とあされ御席を御侍ちあらう
 するよての 法皇カニ重シモリ やあめりにあの尼前。

女はいうある者う 内侍ウケテ げにびは御え忘
 れの御理これの信西が女 困ル心 阿波の
 内侍があれ果よてのかくある
 ままの姿あからあすとも知らぬ
 此の身あれ根みとの更よ思はず
カト さむらふ 法皇カニ 用カニ重シモリ 女院はいつくよ御わたり
 のう 内侍ウケテ 月山へ花摘み御出でてよ

大原御書

法皇 カシテ

式カシテ御供オン又トモは

内侍 ウケテ

式ウケテ大納言ウケテの局ウケテ今

少スコ侍マたせマたマつマまマしマゆマへマやマがマて

御席オンりカヘにてカヘゆカヘべカヘい

後シテ女院サレ上用カニ明カニ

會釋

明日アスもス過スぎス今イマ日ヒもモ寧ニヤくニヤ言コトれコトあ

んニとニすニあニすニせニもニ知チらチぬチ此コノのノ身ミな

かカらカ。左サ々サ先サキ帝テイのノ御面影オンモカゲ忘ワスるル際サカイハ

よヨもモあアらラどド。極ゴク重ジュウ悪アク人ニン毎マ他タ方ハ便ベン唯ユイ

稱シヨウ弥ミ陀ダ保ボ生セイ極ゴク樂ラク。主シュ上ジョウとト初ハジめメなナり。

二ニ位イ殿テン一イチ門モンのノ人ヒト々々成ナリ等トウ正セイ覺カク南ナン無ム

阿ア弥ミ陀ダ佛ブツやヤ。庵アツ室シツのノあアたりアリにニ人ヒト音ネ

のノ聞クえエるル。習ナラひヒくクこれレもモ御オン休ユみミゆユへ

内侍 ウケテ只シ今イマうウこコそソあアのノ胆イデつツたタひヒをヲ女院

のノ御オン歸カヘりカヘにニてテゆユ。式カシテ行ユクれレがガ女院

大納言ウケテのノ局ウケテはハいイづヅれレぞゾ。式カシテ花ハナ籠カゴ

臂ヒタもかけさせ給ふは女院メノイノにて
わたらせ給ふ所ツボも又マタ蕨折ワケの邊ツバへ
たるタ大納言オホノリの局ニヤあり。いかに
法皇ホフウの御幸ミケウにてはシテ中用カニおはまかにあは
妄執マウシの圖像ズの世セを忘れもやらそ
うきみをとまた甲もらせばもるニ海
のカ色シホ。袖スエの柔色ニホもつトまニや

日中ニチナカ用カニ

抽子ヒキコ合

とは思オモへども法ホウの人ニ同じ道ミチよと
頼タノシむありカ一ヒト念ニの窓マドの前マヘ。一ヒト念ニの
窓マドの前マヘ。揚ヒキ取トルのシユ光ヒキ明トクと好コトしつ
十念ジュンの業ノのス楯タテよはシ聖ホウ衆シュウの来キ迎ムク
を侍サマちつるよ。思オモひシざりけるケルけしケシのノ善ニ
古コよ歸カエるルかカとトあは思オモひシ出デのノ邊ツバかカ
げケにニや忍ニるルよヨ教キョウ通トウのノ惠ケみミ末マかけケて

大徳神書

○獨吟

中一 あもれもまじりか大原や芽生の
 里の細道ノミチ 朧ノミチの清水ノミチ 月ノミチあらで
 影ノミチや今ノミチは残ノミチらんノミチ 影ノミチてや幸ノミチ
 の折ノミチもノミチのノミチあノミチるノミチ時ノミチ節ノミチあノミチるノミチらん
 春ノミチ過ノミチぎノミチ夏ノミチもノミチをノミチ北ノミチ条ノミチのノミチ折ノミチあノミチれノミチばノミチ青
 葉ノミチにノミチ交ノミチるノミチ夏ノミチ木ノミチ立ノミチまノミチのノミチ名ノミチ残ノミチるノミチ惜ノミチま
 るノミチ 上ノミチ池ノミチ山ノミチまノミチかノミチるノミチ白ノミチ雲ノミチのノミチ影ノミチりノミチにノミチ

花ノミチのノミチ形ノミチ見ノミチかノミチやノミチ 上ノミチ池ノミチ夏ノミチ草ノミチのノミチ影ノミチけノミチみノミチか
 原ノミチのノミチうノミチこノミチとノミチあノミチくノミチおノミチけノミチ入ノミチりノミチ路ノミチ邊ノミチ道ノミチのノミチ末
 影ノミチとノミチてノミチやノミチとノミチとノミチとノミチてノミチやノミチけノミチにノミチ寂ノミチ光ノミチの
 寂ノミチかノミチあノミチるノミチ光ノミチのノミチ影ノミチをノミチ惜ノミチめノミチたノミチらノミチ
 光ノミチのノミチ影ノミチもノミチ咽ノミチけノミチまノミチ玉ノミチ松ノミチがノミチ枝ノミチま
 咲ノミチきノミチさノミチみノミチやノミチ 他ノミチのノミチ藤ノミチ波ノミチ夏ノミチかノミチけノミチて
 引ノミチれノミチもノミチ幸ノミチとノミチ 待ノミチちノミチ顔ノミチまノミチ 地ノミチ青ノミチ葉ノミチ

○獨吟

クリ上ウツ朝カミカス九
 引れシ牙セと親シむれスハ岸キの額ヒも根ツと
 離ワれたスるハ昔コの命ノと論ンずれハ江ノ
 ほとりトよハつあガがタらス心コ舟フネ。ミシれば
 天ノ上ノの樂シみもハ芽ノ白シ露ノ玉ノ葛ノ
 日ノあガらハ果テぬハ年ノ月ノもハ終ニはシ五ノ衰ノ
 ねトろノ入ノのハ消シえハもハやラれハぬハ命ノ
 うチらハよハ六ノ道ノのハ巷ノよハ迷ヒりハありハ
ホ

クセ中ノ用カニ
 拍チ合ハ一ノ門ノ西ノ海ノのハ波ノよハ深キ沈ミぶハ

もハ知ラれハぬハ紅ノのハうチらハ海ノにハ陪メどモも
 潮ノあレハ飲ム水セズ。餓シ鬼ノ道ノのハ如ク
 なリ又ハ或ト時ノのハ行クのハ波ノのハ荒シ磯ノよハ
 打チ返スすハかノ心チちシてハ船ノ棹ノりハつク
 位キ叫ビぶハ聲ノのハ叫ビ喚ノのハ罪ノ人ノもハかくハ
 やハ俵ノまハりハやハ陸ノのハ争ヒ或ト時ノのハこれハうハ

眞^{マコト}は自^ミの^ノ前^{マエ}の^ノ修^{シュ}羅^ラ道^{ダウ}の^ノ執^{シツ}ひ^ヒあら^ラ
 恐^{オソ}ろ^ろし^シや^ヤ数^{スウ}々^々の^ノ駒^{クマ}の^ノ蹄^ヒの^ノ音^ネき^キひ^ヒ
 畜^{ウケ}生^{シヤウ}道^{ダウ}の^ノ有^{ユウ}根^{ゲン}と^トん^ン聞^クく^クも^モ同^{ドウ}じ
 人^{ニヒト}道^{ダウ}の^ノ苦^クみ^ミと^トあ^アり^リ果^カつ^ツる^ル憂^ウま^マ
 之^シの^ノも^モて^テぞ^ゾ悲^ヒし^シま^マ。眞^{マコト}は有^{ユウ}難^{ナン}
 之^シ事^ジども^モか^カあ^ア先^{セン}帝^{テイ}の^ノ法^{ホウ}最^{サイ}期^キの^ノ
 有^{アリ}根^{ゲン}行^{コウ}と^トか^カわ^ワた^タり^リゆ^ユひ^ヒつ^ツる^ル御^ミ物^{モノ}倍^{ヘイ}り

後^{ノチ}へ^ヘ 狐^{キツネ}う^ウし^シあ^アが^ガら^ラ語^ゴつ^ツて^テ笑^ウせ^セし^シ
語^ゴミ^ミラ^ラカ^カ用^{ヨウ}カ^カ確^{コク}カ^カリ
 ゆ^ユべ^ベ。其^{ソノ}の^ノ時^{トキ}の^ノ有^{ユウ}根^{ゲン}や^ヤす^スは^ハつ^ツけ^ケて
 恨^{ウラミ}め^メし^シや^ヤ長^{チヤウ}門^{モン}の^ノ國^{クニ}早^{ソウ}鞞^{ニョウ}と^トや^ヤらん
ウ^ウシ^シサ^サラ^ラリ^リメ^メニ
 ま^マて^テ飛^ヒ雲^{ウン}へ^ヘひ^ヒと^トま^マづ^ヅ落^オち^チ行^{コウ}く
ウ^ウシ^シサ^サラ^ラリ^リメ^メニ
 べ^ベま^マと^ト一^{イツ}門^{モン}や^ヤし^シあ^アひ^ヒし^シ又^{マタ}も^モ緒^ソ方^{ホウ}の^ノ三^{サン}
ウ^ウシ^シサ^サラ^ラリ^リメ^メニ
 郎^{ロウ}が^ガひ^ヒま^マの^ノや^ヤし^シ様^{サマ}よ^ヨ薩^{サツ}摩^マ寫^{シャ}へ^ヘや
ウ^ウシ^シサ^サラ^ラリ^リメ^メニ
 落^オさ^サし^シと^ト申^{マウ}し^シお^オ節^{セツ}よ^ヨより^リ夕^{セキ}よ^ヨ

支へられ下トリ田カニ今カのカかうカよカと見えカるカ。能カ
 登トの守カミ教カ経カの安カ藝カのカ郎カ兄カ弟カと
 左サ右ウのカ脇ワキ又カ扱ハサみカ最サイ初シのカ供コせカよカと
カ海ウミ中ナカよカ飛トビんカでカ入イるカ新ニ中チウ納ナク言ゴン知チ威イのカ
カ仲ナカあカるカ船フネのカ礎イソとカ引ヒきカ上アげカ兜ユルメと
 やカらカんカよカ戴イタきカあカのカとカ子コのカ家イ長チがカ
 ろカとカろカとカとカとカ取トりカかカつカ。其メのカまカ

海ウミよカ入イりカよカけカりカぞカのカ時トキ二ニ位イ殿テンよカぶ
 色イロのカ二ニつカぎカぬカよカ練ネ袴ハカマのカろカとカ高タカく
 もカさカんカでカ神カミがカ身ミのカ女メ人ヒトあカりカとカも
 敵カキのカ年トシよカのカ渡ワタるカまカ。主ミ上ウのカ御ミ供コ
 中ナカさカんカとカ安ヤス徳トク天テン皇スミのカ御ミ手テとカり
 船フネ端ハタよカ臨リンむカいカつカくカ入イるカぞカとカ勅ツク後ゴ
 あカりカよカ此コノのカ國クニとカすカとカ送オウはカるカ。

かく侍まき前あり極楽世界と
 してめでたき前の此の波の下は
 心持しむらふあれは侍奉ありなると
 位く位く奏し給へばその心得たり
 とて東に向はせ給ひて天照太神よ
 御眼中させ給ひて又十念の御爲
 又西に向はせ給ひまし
 今ぞ知る

日下冠
 所裳濯川の流はは波の底にも
 都ありとふとこれと最期の法襲
 にて千尋の底入り給みみづからも
 續いて沈みしと源氏の武士より上
 げてかひあまき命あがらへ二度龍額
 又あひなかり不覚の海は袖をと
 志ほるる私かりまいつまでもゆ名残

はいりて盡きぬまゝや還幸とすむ
ハコウ 殿々退ム
 ればちや還幸とすむれば杖輿と
ハコウ 杖輿
 早め違ふと寮光院を出て給へば
シテ上 寮光院
 女院の榮の戸よ志づかば程の送
シテ上 寮光院
 らせ給ひて御庵室よ入り給ふ
ハコウ 御庵室
 御庵室よ入り給ふ

梅 枝 概 説

内七卷ノ四

甲斐の國身延山の僧、攝津國住吉にて村雨に遇ひ、とある庵に宿りを求めけるに、
 庵の内に樂の太鼓と舞の衣裳との飾りあるを訝しみ、其仔細を問へば、主の女、是は
 人の形見なり、之に就きあはれなる物語ありとて、昔此住吉の樂人富士といへるもの、天
 王寺の樂人淺間といへるものの為に討たれたるを、其妻悲みてうつつなき有様となり、
 常に太鼓を打ちて慰みしが、其人も今は空しくなれりと語り、其跡を弔ひて給はれ
 と請ひて姿は見えずなりしが、僧の讀經に引かれて富士の妻の靈現れ出で、夫が形
 見の衣裳を着して懺悔の舞を舞ひ、歌を歌ひ、夫を戀ふる様なりしが、いつしか
 消え失せけり。

此曲戀慕哀傷ヲ旨トシソフトリト花ヤカナラヌ様謠フベシ

後シテ	前シテ	ワキツレ	ワキ	役別
樂人富士、妻	里女	從僧二人	旅僧	
面深井 髪 髪帯 着附指箱 烏甲 縫箱陰巻 舞衣	面深井 着附指箱 髪 髪帯 無色唐履	角帽子 着附髪斗目 水衣 縫紋腰帯 扇 珠教	角帽子 着附髪斗目 水衣 縫紋腰帯 扇 珠教 經卷懐中 大口備ニモ	装束 東 附
(目番三畧)目番四	曲柄	月	九	季
級 二	管古順	吉位郡成東團津攝		所

梅枝

世阿彌元清作

ワキ僧二人 用カニ
ワキツレ
次才上
拍子ニ合

捨てるも廻ぐる世の中は捨てるも
廻ぐる世の中は心の隔よりけり

ワキ内 用カニ

引れ心甲斐の國所延山より出てたる
沙門あてのわれ縁の宿生を海度
せんとも多年のなまにての程よ。此の
夜思ひ立ち廻國よ起き候

海支

道行上用カニ

ちづき雲氷の。牙のたそを知らぬ
 移の。月日程あく後りきて
 雨を向へば。夢と厭ふ。神が夜手や
 住の。江の。里にも早く急ぎにけり
 里も早く急ぎにけり。急ぎの
 程よ。これにはや。津の。國住者よ

急ぎての。あら笑止や。餅かよ。村雨の
 降りゆ。これなる。庵よ。宿と借らばやと
 思ひの。あや。又。此の。屋の内へ。業内し
 けに。や。松風。茶。雲の。宿よ。通みと
 りへ。ども。真。碓の。葛。糸。も。あ。く
 心も。す。め。ある。お。節。よ。こと。問。み。人
 は。報。や。らん。引。れ。の。無。縁。の。門

まての一夜の宿と御借し入
シテウシテ
 げにげよ出家の御事一宿の利益
 なるべけれどもさあから傾く軒の草
 殖生のお屋のしよせくて行と御事と
 置かるべきワカレ上 確カリしよしうちふせく
 とも降り来る雨よ立ちまゐる方
 へださうりともかかへ給へ

○小謡

シテ
 げにや雨降り日もくれ竹の一夜を
 つかさせ給へとて下宿 中 困カニ 打ちや此方へと
 ゆる露の蔭の宿のうれたくと
 袖をかたきまて松白りあれや困カニ
シテ
 旅人の西北より起りて西北より
 雲起りて東南より来る雨の脚早も
 吹き晴れて月よあらん曉や前へ

每支

年

位者の松吹く所も心して旅人の
夢をどぶますあふ旅人の夢をどぶ
ますあふ。 羊肉カツテサラシメ アルジ 事ゆ
行事にてゆぞ 羊サラシ 事ゆ
かざりたる古鼓同く舞の衣裳
ゆ不審ゆも シテウケテ げによく
ゆ不審ゆものかおられ人の形見

にてゆこれよつこい義ある物語のゆ
悟つて聞せしゆべ 羊ウケテ 御
物語ゆ シテ語用カニ 昔當國天王寺よ。
侍向といひし人あり同く此の
住者よも富士とやすし人あり
しが 先ラカハ 頃内裏よ管絃の役を
争ひ アラソ 互よ都よ タガヒ どり ノボ には富士此の

毎支

役を賜はるよよつて、シテ 濟同安からず、
 思ひ富士とあやまつて討たせぬ。
シテ 其の後富士が妻夫の別れを悲み、
 常は太鼓をうつて、シテ 慰みゆひりか。
 ろれも終り空しくありて、シテ 道縁
 ながら吊ひて終はりゆ入、シテ かわらに
 又妻しくありゆか、シテ 其の古の富士が

シテ 妻のかわらりの人まてましますか
 らかきうれハ、シテ 遠の古思もなきに安

シテ 借のかわらりところ事あるべからず
 さらば行そ、シテ 此の物深き思ひの
 色よあて、シテ 涙を流し給みぞや
 あり、シテ 何れも女の思ひ深し、シテ 討は慕の
 涙は沈むとあぞか、シテ 表とは隠せざらん

早早カル早カも不不審審の跡跡あり。形形見見の太太鼓鼓
形形見見の夜夜。そそるるままの跡跡。給給みみらん
主主の音音あり。行行けけども。太太鼓鼓の
杯杯ちちずず。答答むむて。鳥鳥驚驚かかぬ
此此の序序代代は。倒倒むむも。かかひひああまま池池水水
の。帝帝すすむむも。かかひひああまま池池水水の。忘忘れれて
年年をを経経るるものものをを。ままたた立立ちち歸歸るる

執執心心をを。助助けけ給給入入とといいひひ捨捨てて。ままかかき
消消すすままくくまま失失せせままけけりり。中中入入語語問問
早早上上。用用カカ確確カカリリ
引引れれ仏仏法法極極々々ななりりとと申申せせども。
法法華華のの最最第第一一。三三世世のの諸諸佛佛の
出出世世のの本本懐懐念念生生成成佛佛のの直直道道あり
おおかかししづづくく女女人人成成佛佛疑疑ひひああるるかかららず
一一者者不不得得作作梵梵天天王王。二二者者帝帝釈釈三三者者

毎毎夜夜

魔王曰去捨輪聖王五去佛身云行
 女身中内即得成佛中行疑中ひ中あり中そ中海中の中
 深中き中執中心中を中暗中ら中し中て中浮中ひ中終中へ中や中
 或中は中若中有中因中法中者中或中は中若中有中因中法中者中
 無中一中不中成中佛中と中説中き中一中度中此中の中經中と中
 聞中く中人中成中佛中せ中ず中と中し中ら中ふ中事中あ中ら中ず中
 及中頼中め中頼中も中し中や中吊中み中燈中の中影中よ中り中も中

○小論
上書月

化イしたる人元の来ニりたりイ。夢イか現イか
 見イたりイともイあイきイはイかイあイ。不思議イや
 亦イ見イれイばイ女イ性イのイ姿イあイるイかイ。舞イのイ衣イ裳イ
 をイ多イしイ。さイあイがイらイ夫イのイ姿イあイりイ。

白イ気イライカイハ

さてはありつる富士が妻の。其の幽
 霊イよイてイまイすイかイ。ほイよイやイ碧イ石イ玉イのイ
 姿イのイ蘆イ。雖イ裳イ子イ脱イはイとイのイ入イりイのイ

後シニ女官妻明カニ用カニ

○切造雜子

上ト又ト知らレれトむラまトうトやトさトうトあトがトら
 妙トあトるト法トのト受ト持トまト違トのト言ト成ト男ト子ト
 のト姿トとトのトなトどトやトばト後トらト給トのトぬトぞト
 御トらトばト御ト用トひトのト力トあトてト 日ト用トラトカトキト 憂トかりト
 身トのト昔トとト懺ト悔トまト語トりトやトさトんト
 さトるトまトてトもトわトれトあトがトらトらトまトあトまトきト
 意ト路トまト侵トさトれトてト長トくト悪ト教トまト随トまトしト

本末

○独吟
○任舞

名中流カ入田カニ

けトるトよトぎトれトばトよトやト女ト心トのト乱トれト髪トゆトひト
 かトひトあトくトもト意ト衣トのトつトまトのト形トんトとト
 戴トきト此トのト持ト衣トとト急トしトつト常トにトのト
 おトちトしト此トのト太ト鼓トのトねトもトせトずト起トきトもト
 せトずト海トにトまトきたトへトのト枕ト上トまトあトるト執ト心ト
 をト暗トしトつト佛ト前トまトあトるトべトしト曉トのト
 今トのト教トへトやト思トひト出トでトたトらト一ト念トのト

毎夜

日ヒ發ハツるル反ハ病ヤマとありつツ繼ツぎギるル反ハ
シれレ藥ヤクなりリとト古コ人ヒトのノ教シヨウへヘあアれレはハ
 思シひヒ思シひヒしシ忘ワスレれレ草クサもモ住ジヤク吉キチのノ
ク岸キ又マタ生ナマみミてテあアらラばハ手テおオわワ
セまマしシ我ワがガ心シン執シツりリあアらラぬヌのノかカたタ
シ思シひヒ執シツ心シンをヲ助タシけケ給ツへヘわワかカけケにニ
シ面オモ白シロやヤ同ドウトトくクはハ懺ザン悔ケのノ舞マヒをヲ奏ソウ

○獨吟
○仕舞

トてテ愛アイ急キウのノ心シンをヲ捨シテ給ツへヘいイざザいイざザ
シさらラばハ高タカ執シツのノ雲クモ霧キリをヲ拂ハラひヒ夜ヨのノ
ツ月ツキもモ半ナありリ夜ヨ半ナ樂ラクをヲ奏ソウでデんン
ト心ココロもモ共トモにニ住ジヤク吉キチのノ松マツのノ際サヘよりリ眺ヒ
シむムれレばハ彼カもモてテ結ムスへヘるル淡タン路ロ写シャ
ト伊イもモ靜シヤウかカらラ青アヲ海カイのノ青アヲ海カイ波ハのノ
シ彼カ返ヘンしシかカへヘすスやヤ独ドクのノおオとト得エてテ

海支

七

軒端の梅又鶯の刺啼くや花の

越天樂 調へや調へ梅が枝

梅が枝よこそ鶯の巢とて風吹か

めりよせん花又宿る鶯

面白や鶯の面白や鶯の聲に誘ひ

せられて花の陰よありたり

われも序法よ引き後わけても

序法よ引き後わけて今目前よ

立ち舞み舞の袖これそ女の夫と

恋みる想ま恋の鼓うつあひ

我か者扱やあ思へば古と思へ

ば古と語るあほも執心ごと

中せば月も入り音楽の音は

松風よ類へてありは切け

梅文

梅

暮れは面敷をかりや疎るらん面敷をかりや疎るらん。

本末

一巻

誓願寺 概説

内七卷ノ五

一遍上人、紀伊國熊野權現より感得せる六十萬人領の勸進札を普く國土に弘めんとて都に上り、誓願寺に到りて之を諸人に授けけるに、一人の女出で来りて御札を給はり、其札に六十萬人決定往生とあるを見て、六十萬人より外は往生に漏るるにやと問ひければ、上人、六十萬人とは六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上々妙好華此四句の頭字一つつを取りていへるなれど、素より漏るる方無き御法ゆゑ、人數をいかで定むべきと答へければ、女いたく喜び、さらば此寺に掲げられたる誓願寺といへる額を除き、上人の筆にて六字の名號に書きかへて給はれと請ひ、其身の和泉式部の靈なることをほのめかして姿を隠しぬ。上人女の請のままにすれば、式部の靈現れ、上人に依りて佛果を得たるを喜び、舞を舞ひ、菩薩聖衆と共に六字の額を禮しけり。

此曲總じて殊勝ナル所ヲ開カニ語ラズ
小書 三廻 乏位走り

役別	ワキ一 通上人	ワキツレ 從僧二人	前シテ 里女	後シテ 和泉式部
装束	角帽子 着附無地駝斗目 水衣 白大口 縫紋腰帶 扇 珠敷 札懐中	角帽子 着附無地駝斗目 水衣 白大口 縫紋腰帶 扇 珠敷	面若女 髪 髪帶 着附摺箔 色入唐織着流 水晶珠敷持	面若女 天冠 黒世 着附摺箔 緋大口 紫長絹(又舞絹ニモ) 葛扇
季	三	月	曲柄 三番目	(物葛) 三番目
所	京都極六角般若願寺	一	暫古頓	級

抄巻 教寺

世阿彌元清作

ワキ僧 用カニ
ワキ上 人
次オレニ
拍子ニ合
教への道も一聲の
法と四方は弘めん
行者一遍と申す聲あてのわかれの
度三態野よまゐり。一七白糸籠中し
證成殿よ通夜ヤしてゆくべ。あら
たよ靈夢を共家りての。六十萬人

改定住生の序札を。遍く廻去よ
 弘めよとの。空を又よ任せま。都へと
 志してゆ。道行三上。弘院頼む。弘ひも三つの
 御山と。弘ひも三つの御山と。今日立ち
 出づる。振衣紀の。閑守が。手束ら。出で
 入る日。救重ありて。時も。そあれ
 春の頃。花の。都よ。急き。けり。花の

急きよ。急きよ。けり。急ぎの。程よ。

これのは。や。都。哲。弘。寺。急。き。て。ゆ。

告よ。任。せて。札。を。弘。め。ば。や。と。思。ひ。ゆ。

有。難。や。げ。に。佛。法。の。カ。と。て。貴。賤。

群。集。の。き。と。み。社。と。連。ね。踵。と。つ。い。て。

知。る。も。知。ら。ぬ。も。お。り。あ。へ。て。念。佛。

三。味。の。道。場。よ。出。で。入。る。人。の。有。難。き。よ

カル上
 拍子合大

佳生ワウジヤウも漏れモゆるレもレやらん返す返すも
 不審フシンよこそコそレ久キウげケはハよくヨクはハ不審フシンの
 ものかおモノカオこれコレの三態サンタイ野ノのは夢ム又マタ想ソウ
 よヨ回ヘ句クの文モンありアリ其シの回ヘ句クの文モンの
 ぶフの字ジとトりリてテ幾オウク文モンのためために書カき
 つツけケたりリたタはハ波ハ定テイ之チ佳生ワウジヤウ南ナン無ム門モン跡ジ
 院ダ佛ブツとト此コノの文モンはハかりカりリ御オノ輕ケイみミゆるル

ミテ 因カニ

ことコトをヲそレ回ヘ句クの文モンとトやらんカ妙ミョウ乎ヤあるル
 事コトありアリてテあるルやらんカ愚オロシ疾シヤクの種タネ等ト
 よヨ糸イト一イツ終シュウへヘ偶ウ々カいイてテいイてテ語コトつツてテゆユせ
 中ナカさんサン六ロク字ジ名ナ號ガウ一イツ遍ベン法ホフ十ジュウ界カイ依エ正シヤウ
 一イツ遍ベン體タイ萬マン行ギヤウ離リ念ニエン一イツ遍ベン終シュウ人ニン中チュウ上ジョウとトを
 妙ミョウ好カウ華カ。此コノの回ヘ句クの文モンの上ウヘの字ジ
 あれアレハハ六ロク十ジュウ萬マン人ニンとトの書カきキたタるルなりナリ

シテ女門

今こそ不審春の夜の。闇をも
照す。法苑の教へ。光明遍照十方
世界。漏る方あり。清法ありと。
僅か。又六十万。人。数。を。い。か。で
定むべき。シテ。明。く。や。心。得。たり。
此の御札の六十萬人。其の人。救。と。ば
打ち捨て。改定。法。生。南。無。阿。弥。

○小謡

阿彌陀佛と。念。ず。あ。ら。ば
引。れ。こ。そ。即。ち。改。定。す。生。あ。れ。わ
行。事。も。皆。お。ち。捨。て。南。無。阿。弥
陀。佛。と。唱。め。れ。ば。佛。も。わ。れ。も。あ。り
けり。佛。も。わ。れ。も。あ。り。けり。南。無
阿。弥。陀。佛。の。聲。バ。カ。リ。至。誠。心。深。心
也。向。普。賢。願。の。鐘。の。聲。耳。は。染。み。て

和歌六下

七

まこと此の教へ或ハ利益無量罪
 又の縁經の後の世も 法苑一教と
 聞く物を 有難や有難やハ萬諸
 聖教皆是門法院佛ありべし此の由
 本きも上人もたが同し法誓願寺
 ぞと佛と上人とを一體と拜みやす
 あり。如令よ上人よやすべき事の由

行奉りてゆぞ 誓願寺と打ちたる
 額と除け。上人の御手跡よて六字
 の名號よありて終はりのへ 此れハ
 不思議なる事と承りゆものかお
 昔より誓願寺と打ちたる額と除け。
 六字の名號よあすべき事。思ひも
 よらぬ事よゆ 此れも法本

半同用カニ

佛説は伊せ抄等教寺と打ちたる類を

除け六字の名號と書きつけりて佛

あは後しなれバ待諡 上三入 用カニツカリみろや異音董

トつろみまや異音董トつろ危降

り下り音楽の聲まゐる事のある

たまよ元八れよつけても称名の心一つ

を頼みつ。鐘打ち鳴し同音よ

半中 改ニ用カニ
声合 拍子合六

南堂阿弥陀佛は院如來

後ニ端線上 用カニ後ニ
出端

あら名難の類の名號やおま世の

念生海度のため佛の清名を顯し

て佛前よ後す有難さよ。われも

假ある夢の世よ和泉式部といをれ

し身の佛果を得るや極樂の歌舞の

空の障とありたるあり。二十五の

地上

○サシ曲獨吟
○切近雅子

到^トの^ノ薩^{サツ}を^シ成^ジの^ノ法^{ホウ}よ^クの^ノ雲^{クモ}た^ラあ^ハび^ク
 夕^{ツキ}日^{ニチ}歌^カ 常^{ジョウ}の^ノ燈^{トウ}歌^カ清^{スミ}く^ク司^シあ^ガら^ラ
 こそ^トぞ^ゾ極^{ゴク}樂^{ラク}世^セ界^{カイ}の^ノ生^{ナマ}れ^レけ^ルか^カ
 者^{モノ}難^{ナシ}き^キ又^{マタ}も^モも^モ當^{トウ}寺^ジ誓^{チカ}を^シ教^{キョウ}寺^ジと^ト
 中^{ナカ}し^シなる^ルの^ノ天^{テン}智^チ天^{テン}皇^スの^ノ法^{ホウ}教^{キョウ}清^{スミ}本^{ホン}
 き^キは^ハ慈^ジ悲^ヒ萬^{マン}行^{コウ}の^ノ大^{ダイ}雲^{クモ}薩^{サツ}を^シ成^ジの^ノ生^{ナマ}れ^レけ^ルか^カ
 明^{メイ}律^{リツ}の^ノ法^{ホウ}作^{サク}と^トか^カや^ヤ 律^{リツ}と^トい^ハひ^ハ佛^{ブツ}と^ト

い^ハひ^ハた^タぞ^ゾれ^レ氷^ヒ波^ハの^ノ隔^{カキ}あ^リ。慈^ジる^ル又^{マタ}
 和^ワ光^{クワウ}の^ノ教^{キョウ}廣^{ヒロク}く^ク。體^{タイ}を^シ現^{アラハ}れ^レて^テ
 命^{メイ}生^{シユ}海^{カイ}度^{タク}の^ノ本^{ホン}き^キたり^リ。生^{シユ}れ^レば^バ
 毎^{マイ}日^{ニチ}一^{イツ}度^{タク}の^ノ西^{サイ}方^{ホウ}淨^{ジユウ}出^{シュツ}又^{マタ}通^{ツウ}ひ^ヒ給^{キヨク}ひ^ヒて^テ
 来^{ライ}迎^{イユウ}引^{イン}接^{ケツ}の^ノ誓^{チカ}ひ^ヒと^ト現^{アラハ}れ^レて^テす^ス
 生^{シユ}歌^カ。道^{ドウ}な^ナま^マの^ノ孤^コ雲^{クモ}の^ノ上^{ウヘ}あ^ハれ^レや^ヤ薩^{サツ}を^シ成^ジの^ノ生^{ナマ}れ^レけ^ルか^カ
 来^{ライ}迎^{イユウ}を^シ落^{ラク}日^{ニチ}の^ノ前^{マエ}と^トか^カや^ヤ昔^{キキ}在^{アイ}空^{クウ}山^{サン}の^ノ

序名の法華一佛今西方の法苑如来
 慈眼視念生現れて安婆示現觀世
 音三世利益同一體有難や我等が
 ため悲願あり 若神成佛の光と
 受くる母の人のわが力よゆき難き
 法法の声毎の水別れ掉きても後る
 彼の岸よ至り至りて樂みと極むる

國の道あれや十悪八邪の迷ひの
 雲も空晴れまの月の西方も
 こゝとある事をからず心浄出さる
 此の地を願寺とねむありの教舞の空薩
 もごまごまの佛事とあやる心かあ
 シテワカ上 獨吟
 ひきりあは佛の序名と尋ねん
 おの海を法の場人法の場人

○仕舞

の^{シテ}響^{シテ}げ^{シテ}にも^{シテ}妙^{シテ}ある^{シテ}稱^{シテ}名^{シテ}の^{シテ}扱^{シテ}々^{シテ}塵^{シテ}空^{シテ}に
 響^{シテ}音^{シテ}く^{シテ}の^{シテ}音^{シテ}樂^{シテ}の^{シテ}聲^{シテ}異^{シテ}香^{シテ}薰^{シテ}ト^{シテ}て
 花^{シテ}降^{シテ}る^{シテ}空^{シテ}の^{シテ}社^{シテ}と^{シテ}カ^{シテ}ハ^{シテ}も^{シテ}や^{シテ}返^{シテ}す^{シテ}返^{シテ}す^{シテ}も
 貴^{シテ}き^{シテ}し^{シテ}人^{シテ}の^{シテ}利^{シテ}益^{シテ}か^{シテ}あ^{シテ}ら^{シテ}ず^{シテ}菩^{シテ}薩^{シテ}の^{シテ}所^{シテ}宛
 皆^{シテ}一^{シテ}同^{シテ}子^{シテ}の^{シテ}禮^{シテ}し^{シテ}給^{シテ}ふ^{シテ}の^{シテ}あ^{シテ}ら^{シテ}た^{シテ}な^{シテ}り
 ける^{シテ}幸^{シテ}す^{シテ}瑞^{シテ}か^{シテ}あ^{シテ}る^{シテ}。

大正九年八月廿五日印刷
 同 年八月三十日發行

訂正著作者 廿四世 觀世元滋

發行者兼 檜 常之助

發行所 檜 大瓜

印刷所 江川 堂

著作権
 所有
 許不
 慙



京都市上京区二條通麩屋町東北角

東京市神田區錦町二丁目拾番地

東京市四谷區傳馬町貳丁目

終